

## 「カリスマ主婦」からみる女性のライフコース選択の変化

大西 貞子

ジェンダーの一例としてしばしば取り上げられる、性的分業意識を語る上で、専業主婦に関する研究は重要であると考えられる。これまでの「男女共同参画」の流れに反する「カリスマ主婦」については特に研究が必要であるにも関わらず、未だその研究はなされていない。本研究では、雑誌新聞記事において「カリスマ主婦」について取り上げた記事を調査し、メディアと女性のライフコース選択の変化との関係を分析することで、「カリスマ主婦」がどのようにして生まれたのか明らかにすることを目的とする。

本研究ではまず、雑誌記事索引データベース「大宅壮一文庫雑誌記事索引」、朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」、日本経済新聞データベース「日経テレコン21」の3つのデータベースを用いて、「カリスマ主婦」に関する記事を検索した。刊行年ごとに集計し、変化からメディアにおける言葉の広がりを見た。また、その内容の移り変わりをみるため、記事内頻出単語の変化をKH coderを用いて調査した。それらの結果を踏まえ、「カリスマ主婦」の登場と女性のライフコース選択の変化との関係を探るべく、総務省統計局全国労働力調査の結果を用いて、「カリスマ主婦」の広がりや女性の労働力人口の増減とを比較した。

結果、雑誌における「カリスマ主婦」は1995年に登場し始めた。その後1999年から毎年取り上げられ、2005年～2007年にかけてピークを迎えた。内容は、特定の「カリスマ主婦」について人物を紹介→お金にまつわる内容→実際にアイデア紹介する具体的事例というように変化していった。新聞における「カリスマ主婦」は、朝日新聞においては2000年、日本経済新聞においては2001年に初めて登場した。登場は雑誌より遅いが、その件数のピークは両紙ともに雑誌より早かった。しかし、増減の仕方は雑誌と類似しており、何らかの時代の影響を受けていることが推測された。内容は、時事に左右される傾向があり変化は追えなかったが、「料理」という単語が次第に頻出するようになり、新聞記事内における「カリスマ主婦」が人物を表す代名詞という言葉のみの役割から、人物の具体的な紹介へと内容を具体化し、一つの存在として捉えられるようになったことが分かった。また、雑誌記事数の変化と労働力人口とを比較したところ、その変化の仕方には類似する点があった。しかし、労働人口におけるいくつかの職業によってはそれがみられないものもあることが分かった。

調査の結果から、「カリスマ主婦」は女性の労働者の急増に伴い誕生し、女性労働者の増減と連動して変化してきた。「カリスマ主婦」は女性労働者の増加という近代の日本社会にはない急な動きに対して社会均衡を図ろうと生まれた流れであると考えられる。

(指導教員 辻 慶太)